

日本山岳会の象徴 ルームの今昔

織内信彦

■新ルームに期待

クラブルームの改築が終わり、見えるように立派になった。入り口のドアを開けると、ライトアップされた足達源一郎さんの北穂高の油絵が、ひときわ鮮やかに浮かび上がっている。担当した役員や委員諸兄姉の努力を多としたい。

しかし今回拡張された奥のほうの部屋は、まだ調度類も整わず殺風景で、ソファに座って何となく雑談を楽しむには、もうひとつ物足りない感がある。当分はやむを得ないとしても、おいおい談話室らしく充実していくものと期待している。

■戦災に遭った虎の門のルーム

ルームといえば、私が会員になった当時は、虎の門の交差点の不二屋ビルにあった。蠟山政道氏を筆頭に、松方さんや浦松さんが関係していた進歩的

政経学者の集団である東京政治経済研究所が階段を上がった三階の左側にあり、その向いに我が日本山岳会のルームがあった。そのあたりの雰囲気は何か格調が高く、近ごろのようにルームの中で、目をつぶって合唱などをやらされるような風習などはなかった。

虎の門のルームは昭和二十年五月二十五日、米軍機の無差別爆撃で灰となってしまうのだが、それを知った京都在住の藤島敏男さん(故人・名誉会員)から、ルーム開設当時を憶い、焼失を惜しむ切々たる便りが、いち早く私のところに届いた。それは今も私の手元に残っている。私にとって、今回のルーム改築に伴う拡張部分の殺風景な部屋と妙に重なるところがあるように思うので、その一部を紹介したい。

「昭和三年かにあの一室(筆者注・



1994年(平成6年)

11月号(No. 594)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

山岳会の象徴・ルームの今昔……	1
追悼・河野幾雄君を思い巡らす…	2
『探検の殿堂』湖東町に開館……	3
ホークスの山……	4
報告	
ジャック93会・上高地集会……	6
解説員指南帳……	6
山と医療……	7
支部だより……	8
宮城 秋田	
海外の山……	9
東西南北	
マザマス山岳会訪問印象記……	10
還暦登山隊コンデ・リ登頂……	10
魚沼駒ヶ岳とオオカミ……	11
今西さんの登頂山名リストにもれた山……	12
ヘディンの世界・青藏高原へ……	13
自然保護随想……	11
書籍受入報告・住所変更……	15
図書紹介……	16
新入会員……	17
会務報告……	18
INFORMATION・ルーム日誌	19

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木・土曜日 10～20時
水・金曜日 13～20時

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜日を除く毎日
13～20時

右 新装なった山岳会のルーム。ラウンジから会議室方向を見る。
下 披露をかねた9月4日のビールパーティーには、大勢の会員が…。久しぶりの今井喜美子会員の顔も…。



不二屋ビル」を借りてガランとした白壁の部屋で最初の宵を過ごし、爾来あの二室に数知れない想い出を持つ小生にとっては、ルームの焼失は、生涯における大きな痛恨事として永く忘れ得ぬ事柄となるでせう」

■役員は交替でルームに

藤島さんの言うガランとした白壁の部屋にも、やがてウエストンの寄贈書や、秩父宮撮影のマッターホルンの写真、岡部正信、板倉勝宜両ご遺族から寄贈された書棚、それは英国の国樹といわれるオーク材を用いた暗褐色ばかり塗り見るからに重厚古風な逸品が並び、やがてシュラーギントワイト兄弟の本などを含む木暮文庫なども收藏され、クラブルームらしい貫禄を備えたのであった。

そして、なによりもよかったのは、役員をやっていた槇さんや、松方、浦松、角田、逸見その他の錚々たる顔ぶれの人たちが、当番制で毎晩誰かがルームに詰められ、来訪の会員との対応にあたっていたのではなかったかと思う。上越国境の山の状況を知りたければ角田吉夫さんのみえる日に、スイスの話を聞きたいと思ったら松方さんか浦松さんの来る日を、我々は会報に予告されているその日を選べばよいのであった。

■会報「山」のことなど

ところで、その頃の会報の編集者に若い吉阪隆正君がいた。学生服でルームに来ていたからまだ学生だったのだろう。会報の編集をやったのは、あるいは卒業直後だったかもしれない。唯我独尊の塊みたいな関根吉郎君などと同じ大学山岳部の人だが、どちらかといえばニュートラルな考えを持っているようにみえた。しかし、その吉阪君の編集した会報の紙面に、日本山岳会にはいささか不似合いなコミカルなカットがたくさん使われていたのは、吉阪君の趣味だったのか。

山岳会の重厚な性格とはちぐはぐな紙面作りのように私なんかみていたけれど、若い人は奇抜なことをやるものだなあと思うより外なかった。そういう私も吉阪君よりわずかに五、六歳の年長にすぎなかったのだが。彼は間もなく出征し、会報は塚本繁松さんの手で再び元の姿に戻った。その吉阪君は後年フランスのル・コルビュジェの弟子となり、日本を代表する建築工学の学者の一人となったことはよく知られている。

■自前のルーム獲得へ

ルームはそれから二転三転するのだが、私が役員として深く関わったのは神田錦町の向井ビルから湯島の利根川ビルへ借室したときと、現在地のサンビューハイツの区分購入をしたときで、

湯島のビルは近くに勤めていた須田紀子さんたちに随分と入れ知恵してもらったことを覚えている。

昭和五十一年というところ、列島改造景気の後遺症で景気はよくないのに物価の高騰が続く、そのため利根川商事から再々家賃値上げの申し入れを受けた。やむをえず四月の総会で約八十万円を増額し年額四百九十万円の借室料を計上して急場をしのいだ。

考えてみると、この家賃を銀行からの借入金で利息と見立てれば五千万円くらいは借りられるはずである。あと二、三千万円を募金で資金造成をすれば、少なくとも同面積くらいを購入できるのではない。問題は借入金の年賦償還だが、会員の増加に伴う収入増などを見込めば、何とかやりくりできるのではない。

誰でも考えつくことだと思うが、私をはじめ理事の皆の気持ちがあるという方向へ結束し、今西錦司会長の了解も得て、いよいよ自前ルームの取得へと動き出した。(自前のルームはこれより前に御茶の水のルームがあるが省略する)

山岳会というところは何時の時代も多士済々で、その方面の現場に明るい理事の橋本清君などが奔走すると、それこそアツという間に見つけてきたのが、まだ設計段階のサンビューハイツ

だったのである。レイアウトや内部工事、募金などに時間をかけ、引越しが完了したのは五十三年の三月、私はもう任期が終わって会務を離れていたから、実際の進行は望月君が中心となって仕上げを行った。

*

クラブルームは会の象徴であり、会員がクラブライフを楽しむ拠点である。山岳会も一人前になった。符節を合わせるように、新しく入会する会員が目に見えて増えてきたのは、決して偶然ではなかったと私は思っている。

改築された新ルームは会員皆の宝物だ。大切に利用しようではないか。

追悼

河野幾雄君を思い巡らす



金山淳二

河野君は慶応医学部で、忙しい人だったが、こんなこともあった。谷口現吉君と私が二月、八ヶ岳縦走したとき

には無人の本沢温泉から赤岳までサ
ポートしてくれたし、山岳部の主力で
一月、西穂高主稜に雪中露営したとき
には西穂の途中まで登った。

また、ある夏休みに、新着のパウアー
著「ウム・デン・カンチ」をバラバラ
にして分担翻訳したことがあったが、
そのとき一部を引き受け、秋の木曜会
に解説したこともあった。河野君は山
岳部生活を彼なりにエンジョイしてい
た。

日本山岳会や登高会は有り難い。戦
後久しぶりに出席してみると、悲しい
ニュースを聞くことも多かったが、珍
しい顔ぶれも多かった。その中に河野
君もいた。横浜済生会病院に勤めてい
るという。二十年ほどそこに勤め、い
よいよ蒲田に河野医院を開いた。それ
でも一日、二日の山登りは続けた。聞
けば近隣の医者同士助け合い、患者に
は迷惑かけないと胸を張っていた。

その後、日本山岳会の評議員に推薦
された。その頃、今まで蓄積されてい
た日本山岳会創立当時の原点、クラブ
ライフのエネルギーが吹き出し、土曜
会の常連となった。その延長線上の赤
シャツクラブ、三水会、あんころ会と
次第に交遊が広がったが、これも彼の
知性の賜であろう。

私を木暮祭に結びつけてくれたのも
彼だ。佐藤久一朗氏制作のレリーフ、

渡辺宏之氏寄贈の大谷石の台石、それ
を現場まで運搬した三井松男山梨支部
長。この慶応三先輩の協力で金峰山麓
・金山平に移築された木暮理太郎先生
の碑だからぜひ来いという。私も虎の
門時代、木暮会長の下で幹事をしてい
た関係もあり、出かけてみると折井健
一氏ら大勢の旧知に会え、山村政
光氏ほか地元の皆さんの心温かいもて
なしにすっかり感激、毎年参加するよ
うになった。しかし去年は河野君は欠
席、今年は私も欠席した。

また、三田幸夫さんとの交遊も濃か
った。三田さんは以前から鎌倉・伊豆
・丹沢あたりの山歩きを金坂一郎、太
田敬氏らの運転で島田巽、小原夫妻、
織内信彦氏らと楽しんでおられ、初め
は辰沼広吉ドクターがお供していたが、
後で河野君に替わった。

また恐らく彼の唯一の山の記述とし
て「低山高嶺」―神谷恭・遺稿と追悼
(昭和五十一年茗溪堂)があり、その
最後に神谷さんの山登りと人柄につい
て「小伝」として三四ページにわたっ
て書き、文才の一端を覗かせた。

八月七日朝、心不全で八十四年七か
月の生涯を閉じた。彼の弟の之保君が
北岳に登り、帰宅した翌朝のできごと
だったという。恐らく幾雄君も病床か
ら一緒に登り、大満足しての大往生だ
ったと私は信じている。ご冥福を祈る。

西堀榮三郎記念 「探検の殿堂」

滋賀県湖東町に開館!!

薬師義美

本会の会長(一九七〇―八一年)を
務められた西堀さん(一九〇三―八九
年)を記念する博物館「探検の殿堂」
が、滋賀県の湖東町に完成した。八月
三日に竣工し、同七日から一般公開が
始まった。



湖東町に開館した「探検の殿堂」舟の形がユニーク

この殿堂が湖東町に建設されたのは、
西堀さんの祖父がこの町の出身であっ
たことと、例のふるさと創生事業が結
びついたことによる。一九八八年秋に
上田篤都市建築研究所(京都)が湖東
町に南極ミュージアムの建設構想を提
案。九二年のはじめに梅棹忠男、本多
勝一、上田篤の三氏が協議し、名称を
『探検の殿堂』へと変更し、基本構想
がまとまったという。

鉄筋コンクリート二階建ての殿堂は
大きな溜め池に浮かぶように建ち、ほ
とんど窓のない、舟の形をし
た特異なスタイルをしている。
建設費などを含む総事業費は
十二億八千二百万円と資料に
あった。

一階には、まず玄関ホール
につながって西堀榮三郎記念
室がある。登山家・探検家・
科学者としての西堀さんの業
績が、遺品や写真などで詳し
く紹介されている。

続いて南極探検ゾーン。こ
れが本殿堂の目玉ともいえ、
マイナス二五度の南極の自然
の体験室である。前室でビデ
オによって南極の予備知識を
得たあと、備え付けの防寒服
を着用して、細長い通路から
氷雪の極地へと向かう。いち

どに二十五人ほどが入室でき、所要時間は約二十分だが、中央部の氷室では七分ほどすると、ビデオ画面に合わせ、プリザード(強風)が吹く。

私のメガネは、吐く息で薄氷がはりつき、すぐに見えなくなるし、靴底からジワジワと寒気が伝わってきた。一角には第一次越冬時の昭和基地の一部が再現されている。その壁面の温度計は零度を示していたが、体験室に持ち込んだ自分の温度計はマイナス二二度を示していた。

二階は探検家の殿堂で、日本人探検家四十九人を絵画四十八点(鳥居龍蔵・きみ子夫妻はいっしょに)で顕彰している。巨大な地球儀を真中に据えて、日本とその周辺、ヒマラヤ、東南アジア・オセアニア、北アジア・東アジア、中央アジア、西アジア、南アメリカ、極地、探検の研究家、と九分野に分ける。

山の関係者では、今西錦司、横有恒、堀田弥一、今西壽雄、中尾佐助、川喜田二郎、藤田和夫、木原均、西堀榮三郎、植村直巳、田中薫、深田久弥などの諸氏が並んでいるが、現代を代表する日本画家四十八人の手になる五〇号の大作の競演ともいえそうだ。この絵画制作費だけでも一億七千万円ともいう。まとめられた図録は『日本の探検家たち——未知への挑戦』として販売

(頒価二千元)されており、それぞれの絵葉書も売店に並んでいる。またこの二階の一隅、映像コーナーでは「日本探検小史」(二十七分)と「探検家たちの風土」(二十二分)のビデオが交互に上映されている。

さて、これら四十九人の探検家たちは、どのようにして選考されたのか。それは探検家選考委員会(委員長・梅棹忠男、吉良龍夫、近藤良夫、樋口敬二、本多勝一の五氏)が五つの条件を設けて選出したものである。①原則として未知に挑むフィールド・サーベイであり、広義の地理的探究であること。②近世以降の日本人であること。③現存者の場合は七十歳以上であること。④明確な意図を持ち、自ら探検に参加し、さらに組織した人であること。⑤人類の知的財産となる報告を残していること。この辺の事情については、梅棹さんが図録の中の「四十九人の探検家を選ぶにあたって」に詳しく述べておられる。

山岳会も多士済々であるが、条件すべてを満たすのは容易なことではなさそう。しかし、絵画用パネルにはまだいくつもの空白があり、そこに「つぎはあなたです」と、殿堂の将来をも見据えた、心憎いロゴスがさりげなく小さく記してある。

この「探検の殿堂」は英文でExplore

Museumとなっており、人口一万人ほどの町にしては、といえど失礼になるが、世界でも珍しい町立の博物館である。竣工祝賀会の祝辞の中で、梅棹さんは、わが国の探検の情報センター、発信基地だとおっしゃったが、将来どのように発展、機能していくか、また昨春に開館した、隣接する町立図書館に探検関係の文献も集められるよう、選考委員会の実務を担当した企画委員会(委員長・栗田靖之、鄭仁和、吉田集而の三氏に私)の一員としても、ともに注目し、大いに期待していきたい。

開館以来、記録の猛暑の納涼をかねてか、八月は連日、千から千五百人が殺到し、入場制限と時間待ちがあったようだ。池の堤の上には、寄贈された西堀さんの愛艇「ヤルン・カン」号が鎮座し、また、アプローチの途中にはピッケルのミニメントと、南極犬のタロとジロの像が並んでいる。

西堀榮三郎記念「探検の殿堂」

〒527-01 滋賀県愛知郡湖東町横溝四

一九

TEL 〇七四九一四五〇〇一一

●開館時間 九時三十分〜十七時

(入館は十六時三十分まで)

●休館日 月曜日(祝祭日、振替え

休日の場合はその翌日) 国民

の祝日の翌日 年末年始(十二

月二十八日〜一月五日)

●入館料 一般大人三百円プラス南極体験ゾーン四百円

ホークスの山

北アルプスを越える
タカの渡り



ヒマラヤを越えるツルの渡りについて、会報第五八五号(一九九四年二月号)で松田雄一氏が報告されましたが、北アルプスを越えるタカがいることをご存じでしょうか。カランクルン、カランクルンと鳴きながらツルが優雅にヒマラヤを越えて行くのに対して、北アルプスを越えるタカは音もなく現れ、音もなく去って行きます。しかしその光景ときたら……。

■山の端から端を渡るタカの川

はるか遠く、北(北東)の山の上に、一羽のタカが姿を見せます。かと思うとまるで山から湧くように、一羽また一羽と途切れなく飛んできます。一羽が上昇気流を捕まえ輪を描き始めると、他のタカも吸い寄せられるかのようにその上昇気流に加わり、高く高く舞い上がります。その数、数十羽。時には

上昇気流によって高く舞いあがるタカ



百羽以上になります。そのタカ柱は穏やかな竜巻といってもよいでしょう。帆翔したタカは昇るだけ昇ると突然崩れて、一羽また一羽と南(南西)に向かって一直線に流れ始めます。それはまるで空を流れる川のようにです。

タカの川。ホークロード。その流れは山の端から山の端まで続きます。ただ呆然と空を見あげ、あるいはオーとかワーとか声をあげ、首の痛くなるのも忘れ、ひたすら空を見上げ続けます。多いときには一時間に千羽以上のタカが通過していきます。

白樺峠。標高一六〇〇メートル。乗鞍岳の東、長野県南安曇郡安曇村と奈川村の境、スーパール林道上にある峠。この峠で、毎年九月中旬から十月中旬にかけて見られるタカの渡りの光景です。眼下には奈川渡ダムが見下ろせ、目の前には穂高の山々が広がります。

■二万羽以上が白樺峠を越える

北アルプスをタカが越えることが分かったのはほんの数年前です。発端は鳥仲間の一人在乗鞍の南山ともいうべき有明山で、道に迷ったことから始まりました。約八年前の秋、有明山を登り下山中に道に迷ったN氏は、深い樹林帯の中で道を探すべく木に登りました。そこで彼は安曇野を背景に山麓をかすめて北東から南西に飛んで行く十数羽のタカを目撃したのです。生態系ピラミッドの頂点にいるタカは、繁殖期を除いてはまず群れることはありません。愛知県伊良湖岬は古くからタカの渡りの中継地として知られていましたが、内陸部ではほとんど知られていませんでした。

N氏は渡りだと直感。この偶然の出会いから、情報収集や調査が始まりました。そして四年前によく白樺峠を大規模なタカの集団が、毎年決まって通過することがつき止められたのです。

今年まで四年間の九月上旬から十月

下旬までの定点調査によると、毎年一万羽以上のタカが白樺峠を通過していきます。多いときには一日四千羽以上、ピークの際には一時間に千五百羽以上のタカを数えたこともあります。この数字は普通はめったに見られないタカが、二秒に一羽ずつ通過するという、ものすごい数字です。そして北アルプス全体では、期間中数万羽のタカが飛ぶと推定されています。

■二科十一種のタカが……

さて渡りをするタカの種類ですが、その約八五パーセントをサシバとハチクマが占めています。共に国内及びロシア東部などで繁殖し、サシバはカエルやトカゲ、ハチクマは蜂の子(クロスズメバチ)や昆虫を主な餌とするため、餌のなくなる冬期には東南アジアや中国方面に渡って行きます。その時通過するのが日本です。サシバやハチクマ以外にもツミ、ハイタカ、オオタカ、ノリスなど二科十一種のタカが通過し、渡りのとき以外には信州ではまず見られないミサゴやチゴハヤブサといったタカの中には含まれています。

果たして北アルプスを越えるタカはどこから来てどこへ行くのでしょうか。これまでの長野県内一斉調査から、次のように推定されています。新潟県から日本に入ったタカは長野市付近、飯縄山上空を通過して松本方面に向かい、

安曇野上空を横断して北アルプス側に移り、上昇気流を利用し、山麓に沿うように南下し、白樺峠付近を越えて、岐阜県に入る。その後伊良湖岬には向かわずに琵琶湖上空付近を通過し、九州に向かうのではないかと。

白樺峠はタカの渡りを観察するのに最適の場所ですが、実際には北アルプスをきわめて広範囲にタカは渡っていきます。燕岳、大天井岳、蝶ヶ岳、槍ヶ岳、西穂高岳など多くの場所を観察されています。サシバはトビよりやや小さく、ハチクマはトビと同じくらい大きく、共に尾が扇状であることから、尾が三味線のパチ状であるトビと区別がつけます。九月中旬から十月中旬にかけて一羽または数羽、時には数十羽から数百羽で北(北東)から南(南西)に飛ぶのは、まず渡りと見て差し支えありません。

その頃北アルプスを歩いていたら、ちよっと空を見上げてみませんか。もしロシアから渡ってきて、東南アジアに向かう途中のタカの渡りに遭遇したらきっと感動します。天に向かってタカが舞い、天を横切ってタカが流れるのですから。

十月中旬タカの渡りが終りに近付くと、北アルプスに本格的な冬が訪れます。(信濃支部・信州ワシタカ類渡り調査研究グループ代表)

REPORT

報告

REPORT

ジャック93会

第一回上高地登山集会



45名と大盛況だった第1回目の上高地集会

この会は昨九三年度入会者の同期会である。晚餐会の時に呼びかけを始め、春のさくらハイイクで同期会員の承認を得て発足、「十月一日上高地集合」を合い言葉に計画を進めてきた。

この日午後四時「山研」に集合したのは、特別参加された小倉茂暉常務理事と、韓国山岳会の金鐘先理事を迎えて、計四十五名の盛況となった。

「集合」に先立って、その朝から焼岳へのオプション登山が行われた。前日から来て準備に奔走しながら、自分では山行に参加できないほどの重荷を背負わされた幹事仲間感謝しながら、七時に山研前階段で写真撮影、十四名が焼岳コースに出発した。焼岳小屋で小休止の時、さらに一人が追いついた。

上に進むにつれて感動

的な雄姿をみせていた焼岳も、新中尾峠で昼食の頃には、霧に閉ざされてしまった。そんな中をとにかく登山して、記念写真を撮り、各自のペースで下山、上高地温泉ホテルで一風呂浴びて、本番四時の集合には全員間に合った。

まずは記念写真。席はくじによって、奥穂・前穂・明神・焼岳・六百年・霞沢という名称の六席に配分される。

四時四十分、レセプション演出・司会の野崎幹事の開会宣言。星野代表幹事の挨拶と「ジャック93会」の経過報告。小倉常務理事、本田幹事長の挨拶。この会が日本山岳会傘下の同好会として承認され、独自の活動ができるように発展させようという意思統一があり、金鐘先氏による乾杯。発足当初から国際的な雰囲気となった。

翌二日は、帰宅組、散策組、徳本峠越え、新中尾峠越え、霞沢岳、槍ヶ岳、涸沢入りなど、それぞれのコースをとった。錦繡の美しい涸沢には十二名が入り、四人がその日のうちに北穂へ向かった。私は三日に北穂から涸沢岳を経たが、四日朝の奥穂高岳はうっすらと雪に覆われていた。(加藤求二)

上高地のインタープリターが作った
解説員指南帳

自然保護専門委員会

「山の自然学講座」のメンバーが山研を基地に上高地を舞台にして、はじめてのインタープリターを行った。その模様は前号で報告したが、いろいろと苦労と珍事の体験を通して得た教訓から、「解説員指南帳」なるものを作った。皆様のご参考にもなると思われるので、御覧に入りたいと思います。

◆上高地解説員指南帳

山と医療・中島道郎

1993年制定 UIAA 医療委員会
公認基準について(6)

健全登山10則

- 1) 自分の技倆と体調にあった山を選んで登る。熱があるときは、その原因に関係なく、登山は取り止める。
- 2) 食糧は、主に糖質に重点を置いて計画する。(ビスケット、チョコレート、ジェロ等)
- 3) 水分はできるだけ頻回に、大量にとる。ただしアルコール飲料は不可。アルコールは運動能力と慎重さを低下させる。だから、行動中はこれを飲んではいけぬ。
- 4) ウォーミングアップはゆっくりと。だから最初の30分間はゆっくり歩き始めること。
- 5) できる限り1時間ごとに休憩をとり、食べたり飲んだりすること。空腹、口渇時はいうにおよばず、そうでなくても『少し食べてたぶり飲む』のが疲労防止のコツ。
- 6) 疲労や困憊の様子がみられたら、大休止をとるか、だれかに付き添わ

れての下山を考える。休憩中はブドウ糖ばかりでなく、澱粉などの複合糖質をとるように。

困憊の徴候が明らかな場合は、それは同時に低体温(凍死寸前状態)および、もしくは高山病の可能性もあることを想起すること。

- 7) 小児、高齢者、何らかの慢性病の保持者といえども、それに必要な準備さえ怠りなければ、登山して差し支えない。心配なら、かかりつけの先生に相談すること。

- 8) 海拔2,500m～3,000m以上では、当夜の宿泊地と前夜の宿泊地の間の高度差が300m以上にならないように計画する。

できれば、その日の最高到達地点にそのまま泊まる、ということはないほうがよい。

- 9) ルックザックには、どんなに小さくとも、以下の必要最小限の装備を常備しておく。

サングラス、手袋、帽子、ツェルト、予備衣服、ロウソクとマッチ、懐中電灯、救急医療セット(訳者注：それに非常食1食分。これらはすべてビニール袋にまとめる)

- 10) その山の登山路や気象状況に関する情報は、できるだけたくさん、地元の人から収集する。要すれば、登山届を提出する。

【前提】自然に触れたいとやって来る人々には、まず十分に楽しんでもらうこと、好きになってもらうことが先決。それから具体的に上高地の特性を理解してもらう、というように段階を追っての説明が大切である。

【準備】資料なども、いくつかのパターンを設定して、地域別、用途別に用意する必要がある(解説員なしで自由に歩きたい人もいる)。

【演出】ガイドブック、解説ボードは単に説明ということではなく、相手の感動をそそるもの——分かりやすさ、面白さ、意外性——に。よく聞、聴、訊いてもらうためには、相手にそのつもりになってもらうことが大切である。

【知識】一般的なものの、とくに「花」についての知識は必要不可欠。これが

できないと信用度はグンと下がる。「上高地の植物／亀山章」は暗記しておいたほうがよい。なお女性の場合——より楽しく過ごしたいという人にとって、岩石のことなど話しても意味がない。それぞれの対象に応じた話の展開が必要になる。多くの場合、目に見えてい

るものに関心が集中する。

【適性人数】五～六名か？ 道幅が狭いため、これ以上の人数となると先頭と最後が離れてしまい、解説が通じない。

【場所】他の歩行者の邪魔にならないところを選定すること。日中は暑いので、直射日光の当たるところは避けること。梓川の右岸側では、木道は右側(梓川に近い側)を歩くこと。

【配慮】参加者の年齢に応じて、休憩時間を考慮すること。歩くペースに注意(年齢、体の事情により差がある)し、「お疲れになりませんか」などの気配りが必要になる。体の障害を伴う方には「手を貸す」などの配慮を。

【餌づけ】子供は喜々としてマガモやキジバトに餌をやっており、親もよいことだと思ひ込んでいる。決して動物たちにとってよいことではないが、してはいけないと指導することは難しい。明神池では近辺に「餌をやらないでください」くらいの掲示板がほしい。

【動物への接近】オシドリが木道の近

くにいると、親が子供を木道からおろして鳥に近づけようとする。親としてはこれが子供の自然接近の最高の場と考えているので、注意の仕方に困る。アプローチは「自然に優しく」か。

【自然をいたわる気持ち】参加者の何人かが水筒の水を乾いた根にかけていた。こんなことから自然をいたわる気持ちが生える？

【心構え】参加者の目的は様々なので、無理強いはいできない。朝食、夕食、飲み会、出発前の一時を捕らえて、会話として働きかけることも必要だろう。コーヒーなどを提供して会話のきっかけを作っては……。

【今後の課題】わが家族は「梨の皮など山に捨てても問題はない」という人

もいて、足元の自然保護が気になる。

自然と離れた都会人のいうところの「自然保護運動」とどうかかわり、誘導するかも難しい問題である。

「四力国語パンフレット」は喜ばれるものなので、各山域でもっと積極的な配布活動をしたい。

「山の自然学」と「自然保護への関心」をいかにして結び付けるか？ インタープリターは「自然保護」の言葉を「山の自然学」に翻訳しなければなら

ない。これはほとんど初めての試みで、創造的な仕事になるに違いないと思う。

(大森弘一郎)

JAC
支部だより

全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

宮城支部

'94東北地区集会
七ツ森登山

年ごとに盛会をきわめる東北地区事務担当者会議が、今年も九月十、十一日の両日、宮城県の中央に立ち並ぶ七ツ森を会場にして行われました。担当は宮城支部。この集会には、青森、秋田、岩手、山形、福島、宮城の各支部長（代理を含む）をはじめ、本部から中村純二副会長ご夫妻、さらに東京、名古屋、富山から多くの会員が参加されて総勢六十五名、今年もにぎやかな集会となり、お陰様で楽しい二日間を過ごすことができました。

九月十日、鹿島台町の「みちのく路」に集合。午後、事務担当者会議に続き

て、柴崎徹による「七ツ森の山と自然」と題する講演、夕方からは恒例の懇親会となり、時の経つのも忘れて楽しい山語りが続きました。

翌十一日はいよいよ七ツ森登山、主峰コース、三山掛けコース、遊歩道コースの三班に分かれての登山が行われました。

七ツ森は大森山（笹倉ともいう、五〇六・五メートル）を主峰とする火山岩頸群の山々、七つあるそれぞれの山は標高こそ三〇〇メートル程度と低いながらも鋭く尖って聳え立ち、しかもそれらの山々が集密状態をつくって分



標高は低い、独特の山容で聳える七ツ森山群

布しているのが特徴である。その独特の山容は仙台一円の景観に欠かせないものといわれている。昔は一日で七ツ森を踏破してはじめて成人になるといわれており、山頂には主峰向きにそれぞれ薬師如来様が祀られている。

今回は、主峰大森に登るパーティー十二名、松倉、大倉、撫倉の三つを掛けるパーティー三十五名、遊歩道コースを気ままに楽しむパーティー八名に分かれて行動しましたが、「山は低いに登り甲斐がある。いつか七つ全部に登ってみたい」という感想が多く寄せられました。

来年の会議は岩手支部が担当、姫神山が会場に決定しています。（柴崎徹）

秋田支部

猛暑の中の
姫ヶ岳・奥森吉山行

今年二回目の支部山行は、秋田県北部の山里・阿仁町にある姫ヶ岳（六五〇・五メートル）と、日本の名瀑の一つ安ノ滝上流部、奥森吉の散策を行った。

阿仁町は昔から鉾山の町、またぎの里として知られ、長い間、山とのかかわりを持つ暮らしが営まれてきたところである。姫ヶ岳の頂上は一等三角点

があり、犬の化身である女人と、またぎの青年の秘話が伝えられている。

八月六日、全国的な猛暑はこの山里にも押し寄せ、登る前から汗がしたたり落ちるほどだ。国道一〇五号線からは見えないが、登山口に通じる林道の入り口のある堤まで来ると、三角形の山容が目に入る。

登山口は比内沢の上流、両斜面に伐採根の残る見晴らしのよいところ。一旦沢に下りて斜面を登りきると、前峰の四八〇メートルピークを巻くように道が延びて行く。ところどころ風倒木が道をふさぐが、迷うことはない。

ヒバやブナの大木がまじる樹林帯を登りつめると、三角点のある頂上だ。

古い馬頭観音を祀った碑もあり、正面に森吉山の優美な姿を見ると、疲れも吹き飛ぶ。所要時間約二時間。

（鈴木要三）

下山後の午後六時、山麓の阿仁銀山上岱集会所で懇親会を開催。この日のために、腕自慢の若月会員が狩猟してくれたキジ、ヤマドリ、カモの三鳥で、より鳥鳥？のダマコ鍋に若月、柳田の両会員が腕をふるう。さらに伊藤会員による雪山親善登山と、一昨年の智異山親善登山のスライドを観賞。本日筆者が撮影した姫ヶ岳の生ビデオをみながらの賑やかな酒宴となった。

八月七日午前八時、一行二十四名は

車を連ねて、地元加賀谷会員の案内で奥森吉・桃洞へと向かう。

桃洞は名瀑・安ノ滝の上流部にあり、滑らかな一枚岩の沢床全体に円形の凹穴が散在、まさに桃源郷をかもしだし、奥森吉の代表的な一角をなしている。

日本有数の珍滝・桃洞の滝とは稜線を境としている。九時、中ノ又林道途中の登山口から、尾根筋の道を辿って安ノ滝上流部の小沢との合流点に降りる。

荷物をデポし、安ノ滝の落ち口まで下るが、無数に散在する大小の凹穴は、まさに神の創った天然の浴場である。深淵のところは高巻きするが、道はないので注意を要する。やがて桃洞ムードに酔いしれた某会員、たまらずドボリン。誤って別の浴場へ某女性会員がスリッパ！（本人前後三回も入浴。一行は男性が多く、山の神のヤキモチか）

美しい平滑ノ滝を過ぎると、やがて目の前が一気に切れ落ちる安ノ滝の落ち口に着く。眼下には滝見の人々が小さく望まれる。

デポ地に引き返し、晴天のもとに昼食。午後は上流の小沢を往復し、本流をたどって別の道から帰路についたが、共に桃洞ムード十分であり、一帯には佐渡杉や桃洞杉が茂り、類を見ない珍しい境地となっている。

午後三時、入り口に到着し、次回の参集を約して散会した。（佐々木民秀）

海外の山

あと一息で山頂

江本嘉伸

二十一年前、エベレストの見える丘にホテルを建てた男が、還暦を迎えて、自分の生涯をかけたこの山の頂きに立つてみようかと決意した。

「ベースキャンプまでで、つぶれてしまうかもしれないので、計画は誰にも言いませんでした」

『ホテル・エベレスト・ビュー』経営者、宮原巍（たかし）。ネパールの観光開発を天職と定め、現地に住んで二十九年になる。酸素をふんだんに使い、経験豊かなシェルパの助けを借りれば、まったく不可能というわけではなからう、そのために金がかかるのは仕方がない、と登頂計画を思い決めた時、考えた。

誤算は、許可を取得した九四年にこの山の登山料がハネ上がっていたことだ。シェルパ十四人（うち三人はサガルマータ登頂者）のほかは、チョモランマに登ったことのある友人の貫田宗男（四三）と二人だけの隊だが、少数隊だからといって登山料が安くなるわけではなかった。

宮原は、三月に還暦を迎えている。

登頂計画を決めてからは、縄跳びや腕立て伏せはやったが、高所については、今年七月中旬、チベット側からチョモランマのC3（六五〇〇メートル）まで行ったのがせいぜいだった。その時も「貧血、めまいを起し、もともと気管支を悪くしていた咳きこんだ」くらいだから、計画は慎重だった。

「六八〇〇メートルから酸素を使う」と決め、用意した酸素ボンベは五十本。「無酸素登山」をねらうクライマーには考えられないタクティクスである。

ペリデエ、ゴラクシェップ、と二週間かけて高度順化しながら登り、九月十一日、ベースキャンプ入り。高度への慣れを考えて翌日からアイスフォールへ入った。

十六日にはC2（六四〇〇メートル）まで登り、その後パンボチェまで下りて二日間休養する。九月二十九日再度ベースを出発。頂上をめざしての登攀が始まった。ローツェ・フェースの中ほどのC3（七三〇〇メートル）に二晩泊まったが、強風でいったん下り、十月五日再度C3に入り、翌六日、サウスコルのC4に到達した。

快晴、しかし、一時間もするとジェットストリームが吹き出した。

「青空が広がっているのに、目もあけられない、まともに歩けないんです。テントも破れる始末で」

八〇〇〇メートルのころで、結局三晩過す。C5を作る計画は、酸素を消費し過ぎてダメになった。あとは一気に頂上アタックするしかない。風の強い十月九日夜十一時、出発。

宮原のほかは、貫田とシェルパ六人。酸素のおかげではじめは順調に高度をかき、夜明け前に八五〇〇メートルに達した。意外に早かった。が、八六〇〇メートル地点あたりで、突然目が霞み始める。

「右目だけなんです、最後は一緒にいるシェルパの姿まで見えなくなっている……」

十月十日午前七時三十分、南峰（八七九三メートル）到達。「もう一息だから」と心ははやるが、目がきかなくなった身にはそれが精一杯だった。貫田はさらに三時間をかけて三人のシェルパとともに登頂した。登山料、酸素ボンベ、シェルパ雇費用、装備など総額は千二百万円。贅沢というよりは不器用な、しかし、全員無事という点では、幸せな宮原のエベレストだった。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



カット 中村あや

マザマス山岳会 訪問印象記

正橋剛二



ティンバライン・ロッジ前で富山岳連の訪問団

富山県山岳連盟（藤平正夫会長）と交流を深めている米国西海岸オレゴン州のマザマス山岳会（一八九四年創立）から百周年記念式典への招待があつて、藤平会長以下七人が七月十五日、名古屋空港を飛び立った。

西部開拓時代の駅馬車終着駅ポートランド市に直行便が着くと、エド・ホルト氏が出迎えてくれ、すぐ市内のクラブハウスを訪れた。半地下に地上二階の会館にはベッカー会長が待っていて、会の組織や歴史を説明、資料、図書室、装備保管室などを案内された。

州事務所へ回り、県知事から託された州知事あての書簡を手渡し、一行中の若手三人は明朝の記念登山（マザマスのホームグラウンド、フッド山、三〇四六メートル）のため、その足で山小屋に向かい、残りはエド宅でのホームパーティーに招かれた。ホットタブ（庭先に作られた露天風呂）など珍しいもてなしも受けた。

翌十六日午前、フッド山中腹一八〇〇メートル地点のティンバライン・ロッジへ移動。文字通り森林限界線にあり、一九三七年、時のルーズベルト大統領の特別の肝煎りでできたという立派なロッジであつた。

公式行事は午後七時テラスでのレセプション、同九時式典。それまで近くをトレッキングする。火山灰の山である。珍しい花など写真におさめる。登頂組も夕刻、予定通り帰着。頂上直下四〇〇メートルは氷の壁であつたという。何しろ北緯四五度にある山である。セレモニイでは富山勢一行が一人ひとり壇上で紹介され、藤平会長はF・D・エアーズのピッケルにまつわる日米交流にふれて挨拶され、喝采を浴びた。記念講演は天文学者パーシバル・ロウエル氏によるNASAの最新資料を駆使した太陽系の星々の話であつた。折しも木星へ彗星が衝突する寸前の日、興味深かった。

滞米中感じたことから二つばかり。その一はリーダーの責任である。マザマスでは入会基準がまづきびしい。週一回約半年の講義を受け、かつフッド山登頂二回を経験することが入会条件である。リーダーとなるにはさらに研修を積み、公式の資格認定がある。無資格リーダーが登山して事故が起きる

と、まずリーダーの責任が追及され、訴訟に及び、敗訴は確実という。単に「世話好き」型のリーダーは米国ではあり得ないようだ。

今一つ、登山者は登山口で各々日程に応じて「ブルーバック」（二重のビニール袋）を受けとって入山する。各自、自分のfoesはこの袋に入れて持ち帰らねばならない。自然界に放置しても寒冷地ゆえ腐敗が進まないからである。

なお九月下旬、富山県山岳連盟主管で第三十三回全日本登山大会が催されたが、マザマス山岳会から六人が特別参加、早々に立山、剣岳での再会を喜び、歓を尽くした。

還暦登山隊 コンデ・リ登頂

松永康子

二火会の皆様

雲なく風なく、氷河クレバス蒼く光り、雪壁の白さ、まぶしい輝き、白き神々の座より恵みありて、摩訶不思議と思わるる好天を九月二十九日、コンデ・リ登頂成功。皆様の御厚情ひたすら感謝申し上げます。

還暦登山隊 宮沢美緒子 原田敬子

*

去る九月三日のビールパーティーの折り、皆様のお励ましをいただいで出発した二人から、六二〇〇メートル登頂の知らせが入りました。後日報告会も予定しております。ご協力ありがとうございました。



確実に高度をかせぐ還暦登山隊の二人

魚沼駒ヶ岳とオオカミ

佐藤芝明

平成六年八月七日、三水会有志と越後の名山駒ヶ岳に登った。越後の山々への山行は計画を作るたびに台風、悪天候などで中止になっていたが、「越後山岳」の復刻版で諸先輩の格調高い文章に触れたせいか、このたびは計画

が実現できて満足している。

前日、銀山平に入り、伝之助小屋に泊まる。七日早朝に蛇子沢林道(仮称)に入り、学習院大学開削道に入った。

林道は、伝之助小屋で管理している錠でゲートを開けないと入れないのだが、この山域に造詣が深い片岡先生が藪に埋もれた学習院道の入り口まで見送ってくださったので、不安なく入山できた。塩澤さんが先陣を務め、藪を進んで行く。ブナ尾根になり、やがて道行山に辿り着く。

小倉山を過ぎる頃から猛暑となり、百草池あたりで水筒の水が底をつき、池塘の水を山神からもらって飲むことまで考えた。森林限界を抜けて駒の肩にとりつき、下方の沢を見ると雪渓水が光って見える。小屋で無料水を干からびた体に十分補給した。

駒の背を思わせる山頂は展望がよい。帰路は小倉山、道行山、明神山、枝折峠へと猛暑の尾根を断食行者のようにフワフワと歩いていった。道行山の先で右手(骨投沢)に下る古道を発見した。この先に少しばかり日陰があり、沢から吹き上げる微風に涼をとっていると、下の沢筋から突然「ウオー」という吠声(うなり)が聞こえてきた。直感でオオカミだと確信した。理由は獵期でないこと、銀山平に犬が見当たらないこと、一般人の立ち入りできない沢の上部など。

自然保護随想

近ごろの世相雑感

奥野道治

◆企業努力には勝てない

白神山地が世界遺産に指定された途端、大手旅行業者が観光バスツアーを繰り出し始めた。地元も『花より団子』なのかも知れない。マドロスパイプをくわえた慨嘆派では、とても刃がたたない。

◆逆説的自然展望

あれほど騒がれたゴルフ場造成もパタリと止み、レジャーランドの造成ブルドーザーも野ざらしで錆びついている。バブル崩壊の恩恵?ともいえる。次は日本の産業空洞化で、生活は苦しくなるが、緑も増え、環境もぐんとクリーンになるに違いない。そして、この自然保護随想欄もお役御免となれば、めでたい……。

◆いまどき稀有なこと

ドイツのケルンの大聖堂はNHKの「花の乱」より昔の一二四八年に着工し、六百年かかって何とかできあがったが、完工までに、まだ数百年はかかるという。スペインのガウ

ディの聖家族礼拝堂は百年たって、まだ半分もできていない。この悠々としたメートル単位のヨーロッパのスペインに対し、壊しては造るミリ単位の戦後の日本にあって、孫の代の収益を夢見る造林家は貴重な存在だ。尊敬の念を禁じ得ない。

◆日本の風景

西欧では田園はもちろんのこと街でもいい絵の対象になる。白い壁、赤い屋根など格好のモチーフになるが、日本ではアンバランスで、ごった煮もいところだ。だから画家は山岳や山林、湖沼、湿原または、それらを背景とした鄙びた田舎家を努めて描くより仕方ないことになる。

◆閉鎖的潔癖性は国民性か

今夏、米国の国立公園六か所と豪州の自然公園を歩いてみて気づいたことは、日本を含めた東南アジアのビクターが多い路上では、ちり紙や紙袋の散乱が目立ち、そうでない場所ほとんどゴミを見受けなかった。これは自分の家と庭、門の前だけは掃除するが、外には無頓着な国民性に起因するのかもしれない。国内でも有名な神社やお寺、教会の石段などに、飴の包み紙が捨てられていたりするのには驚かされる。

魚沼山域・只見にはオオカミが生息していると確信している。

平成二年八月、山の神の調査で大白川の五味沢に入り、浅草岳から只見町の僻地・入叶津に下り、民宿に泊まったことがある。尺三寸という岩魚の塩焼きを特注して、宿の主人(佐藤泉氏)と飲んでいたときにワナによる毛皮狸の話が持ち上がった。三十年近く、毎年数十頭のキツネ、タヌキ、テンなどをとるという。

昭和五十年代まで冬山でオオカミの吠声を聞いたという。——結婚したばかりのころ、オオカミがワナにかかったので役場に持参し、学校の先生に調べてもらうように依頼したが、うやむやになってしまった——この話を聞いたときからオオカミ生息の確信を持ち続けている。

さて、骨投沢の由来を独断で書くと、狩人は獲物をこの尾根で解体し、毛皮と肉をとった残りを山の神の使いであるオオカミに投げ与えたところからきたものか。または、昔銀山平に働いた人たちが事故や病氣などで死亡したときに、遺骨を銀搬出の道を経て故郷に送る途中で、この沢に投げ捨てたことからきたものであろうか。

今回の駒ヶ岳登山は山域の美しさと神秘さに触れることができたことはいうまでもないが、魚沼オオカミの生息

をさらに確信する吠声を耳にできたことは有意義であった。

今西さんの 登山山名リストにもれた山

和田庄司

『増補版 今西錦司全集』(講談社刊)の最終配本で、本年七月に出た別巻には、今西さんの「登山一五五二山山名リスト」が収録されている。今西さんが登山された日本の山のすべての山名が、このリストに載っているはずなのだが、登山されたのにリストからもれている山がある。

それは、岩手県遠野市の大垂水(標高八一七・四メートル、三等三角点)という山である。一九八一年五月三日、今西さんは、同じ遠野の石上山(標高一〇三八・一メートル、一等三角点)に登られた。この日、今西さんは、中谷充さん(現岩手支部長)はじめ支部会員と、石上山を「お石神様」と信仰する地元民の登拝路(東麓の道)を登り「信仰の頂上」に着いたあと、藪をかき分け、三角点のある山頂に到着された。西麓から登った佐藤敏彦支部長、阿部国雄会員(お二人とも故人)の両人が、五分後に合流した。

山頂での昼食のとき、今西さんが登

りとは違う西麓に下山したいといわれ、車の関係で、西麓には今西さん、佐藤さん、中谷さん、それに私の四人が下ることになった。

雑木林を下り、眺望のきく芝草に出たところで小休止する。地図を出し、北上山地の山々の山名を調べておられた今西さんが突然、南に見える地図には山名のないアンテナの立つピークを指され「あのピークにも三角点があるで。ついに行こうや」といわれた。私たちは、今にも雨の降りそうな雲行きの中をアンテナ山に向かって南に下った。

芝草地、それに続く牧草地を下り、緩やかな斜面を登ると、三十分ほどでアンテナ山の頂上に着いた。三等三角点の標石をなで、万歳をしてすぐ下山したが、車をおいた樵小屋に着く頃には、雨が降り出した。

林道を下る途中、通りかかった山仕事帰りの母子に山名を聞くと「オーダールミだ」というので、山名を今西さんに伝えた。このとき、今西さんは手帳にそれを書き込まれたので、その夜泊まった遠野の宿で、石上山といっしょにこの山の登山日と山名を地図に記入されたに違いない。

一九八四年三月に「千四百山のしおり」を送っていただいたとき、登山リストに大垂水がもれているのに気づき

「せっかく登ってもらった山の名がリストからもれているのでは、山もがっかりするでしょうから、次のリストには、ぜひ加えてください」という手紙を今西さんに差し上げた。その年の秋、今西さんが六角牛山、白見山登山にこられたときにも、このことを話し、次のリストには必ず入れるということになった。

一九八六年四月、千五百山登山祝賀会に招かれ、当日会場で「千五百山のしおり」をいただいたが、このしおりのリストにも大垂水の名はなかった。五月に三巢子岳、穴目ヶ岳などを登りにみえた今西さんに、またこのことを話すと「つい忘れてしまった。次には載せるから」というご返事があった。その後さらに登られた山を追加して「登山千五百五十二山山名リスト」が作られたのだろうが、石上山の次に当然入るべき大垂水は、今回の全集別巻のリストにも載ってはいなかった。

今西さんが残された登山手帳や地図を調べれば、この大垂水のほかにもしリストからもれた山が出てくるかもしれない。こうした山を加えたら、今西さんが登られた山は、千五百五十二山以上になるのではないだろうか。少なくとも大垂水を加えた「千五百五十三山」が、今西さんの登山山数であると私は思っている。

ヘディンの世界 トランス・ヒマラヤ越え 青藏高原へ

増田昌士(司)

野馬と併走する4WD(尼瑪付近で)

古今の西藏地図を広げると、若き日はまず弓状に連なる大ヒマラヤ山脈に注目した。次にその北にある西藏高原は限りなく広く、そして白い(記載少なく)、ただ「精子の躍動」とも見える多くの湖沼が印象に残っている。

昨夏、新疆・喀什から崑崙越えの新藏公路を、獅泉河・カイラス・ヤルツァンポ河下り・拉薩まで、カラコルムとヒマラヤの北縁を走破(山・七月号)した。

そして、カイラスとマナサロワール湖辺を分水域に、東にヤルツァンポ河(ブラマプトラ川)、西にサトレジ河(ガンジス川)、西北にインダス川の源水点に立ち、神々の座から豊かな融雪水の流れ行く先を思うと、ピーク(点)を中心としてきた尺度を、西の広がりへ修正しなくてはならなかった。

また北の西藏高原は、長江・黄河・メコン・メナムの源水地である。中国・東南アジア・印度に広がり、その悠久の流れは、人を培い、文化を興した。その歴史のドラマを思い、この広大にして複雑な地形と環境、係わる国々を合わせ考えると、芒洋たるものである。

今夏の計画は、スウェーデン・ヘディンの名づけたトランス・ヒマラヤ、即ち岡底斯山脈の間に広がる青藏高原に入り、ヘディンの数度にわたる丹念な足跡を、動力を利用してその一部でも辿りたい。とくにカイラス東北にある隆格爾の古寺にも寄ってみたい。以後は、高原中央を東西に走る新・新藏公路(獅泉河・改則・尼瑪・安多)に出て、安多から青蔵公路を北に唐古拉山を越えて青海省に入る。長江源流域を横断し、再び崑崙山脈東端を越え、青海湖を経て西寧、蘭州に下ります。

*

八月末に出国、上海・成都を経て拉薩に入る。二日間は初めての者へのサ

ービスで、ポタラ宮などの観光と、西瓜、リンゴなどの補食品の買入れなど楽な行動で体調調整をしていた。4WD二台とキャンプ用品・食糧・各種燃料のドラム缶四本をのせたトラック一台で、メンバー六名、西藏人クルー六名の計十二名で拉薩を発った。

■九月二日、早朝出発、羊八井經由日喀則に向かう。岡底斯山脈東端の念青唐古拉やチョモカンリ峰を見た後、大竹卡でヤルツァンポ河を渡り、ラサから中尼公路の新道と合流。十六時、日喀則に着く。タルシンボ寺と自由市場を楽しみ、賓館へ。北京時間で実際の時差は一時間半のずれ、未だ落日は西山の上にある。「三三六キロ」

■九月三日、日喀則から中尼公路を快走、ラサでこの道と別れ、再びヤルツァンポ河の渡船場へ。トラブル発生。渡船の親分が増水を理由に、阿里地区関係の車以外渡河を許さないとのこと。河岸で西藏スタッフの説得を待つ。川幅五〇メートル余で、上手のワイヤーロープを主軸に、手動巻きの補助ロープを振り子式に、鉄製のフェリーを操作するものである。

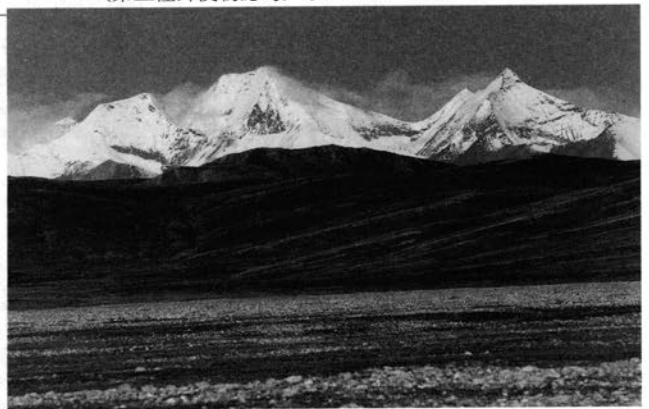
兩岸より、地元民の車と思われるものは二往復している。昼食をとりながら待つこと三時間。これまでと西藏軍管区の阿里入域許可証と、日本からの土産品を持って腰を上げる。このとき

幸運にも公安の車が我が車の後に着いた。すると何ごともなかったように、我が車も渡河できた次第。西藏の大河は悠々である。この日は渡船場より数キロで初日のキャンプを余儀なくされた。「一五五キロ」

■九月四日、遅れを取り戻すべく八時出発、未だ薄暗い。昂仁・桑々と村の間は、拉薩蔵布河沿いに、峠(四八〇〇メートル)を幾度と越え、各峠ではヒマラヤ連山を楽しむ。桑々には昨夏世話になった人々の写真を届けて、やっとラカに着いた。メンバーの中に軽い高山病の傾向が見られ、安眠をはかる。「三五六キロ」

■九月五日、案じた一名が食欲不振であるが「むくみ」はなく、一日様子をみることにする。次のトラブルは、トラックが山間部の急坂、悪路にパワーが上がらず足手まといとなる。一部メンバーに休養とトラックの修理を命じ、我々はトランス・ヒマラヤ横断路を求めて薩噠に向かった。

ルンポ・カンリ峰(七〇九五メートル)の偵察を主にすると、低地の道は求め難い。昨夏通った道を北に入っては戻ること度々。ところどころの地元民の話で、霍尔巴から隆格爾への道はあるが、トラックの入る道はこれのみとの話で、仲巴手前で拉薩キャンプに引き返す。「往復三〇六キロ」



トランスヒマラヤの秀峰ルンポ・カンリ (7095m)

■九月六日、今、旧新蔵公路は薩嘎兵站以奥カイラスへは、未整備で荒廃が進んでいる。代わって、拉嘎より北に直線道路が山脈を越えて青蔵高原に出、措勤・洞錯を経て新・新蔵公路と結ぶ軍用道路が建設された。我々もこの道を行くことにする。

求めるピークを伺いながら途中間欠泉を眺めると、間もなく岡底斯山脈に入る。チョンガム峠(五一〇〇メートル)を越えると、青く光るレツサン湖に出る。今日から四〇〇〇メートル台のキャンプとなるが、全員笑顔で不安は消えた。

■九月七日、高キャンプの初日は、ゆっくり湖と空の紺碧に浸り、湖畔を行

く巡礼僧や遊牧民の包を訪ねて、持参の風船笛を喜ぶ子供に——楽しく交歓をして出発。湖畔の道で、青海での社用後の旅というJACC会員(森本志天氏他三名)の二台の車と会う。カイラスと獅泉河回りで帰途の予定とか。しばし情報と交歓をして別れる。

トランス・ヒマラヤは、六、七千メートル級の山々が高い雪線を引き、ところどころの主峰は氷河を押し出し、緩い起伏の草原と湖に消える。草原のところどころに、少ない降雨時の水蝕溝の空谷が走り、幾重にも重なる峠は五千メートルを越えることも多く、道は東西南北と行方を右往左往。ヘディンの往時を偲ぶ間もない。まして最新の中国地図(軍事上詳細図なし)では、ヘディンの足跡との照合は難しい。遠くの高峰を見て、現在地の確認をする程度である。措勤の手前でキャンプ。

「二四五キロ」

■九月八日、措勤よりトラックを洞錯に先行させ、我々の車は、西の隆格爾へ道を求めて草原と谷を進んだ。ヘディン第二次踏査時のコアラ峠(五二九八メートル)を越え、カロンツオ湖を望む地点で、ついに放牧道となり、途絶えている。九月五日の霍尔巴からの道以外に文明の利器も及ばないことを知る。直ちに措勤に戻り、洞錯に向かう。措勤・洞錯の両所は、青蔵高原山

中の要衝で、兵站が並び、チェック・ポストと招待所もある。またカシミヤ原毛の高地羊毛の集荷地でもあるようだ。軍の大きなバラボラ・アンテナが周辺の環境から異様な感じであった。休む間もなく、先行した洞錯キャンプ地に走った。「計二五四キロ」

■九月九日、日程の遅れで、当地より西の改則は、ドンツオ湖西端まで行き断念、東へ引き返す。洞錯を過ぎ高原の乾燥地を走る。哥洛格山(六五〇〇メートル)の白い連なりを右に青空の下に広がる大草原には、野馬、野鹿の群れが多く、時々伴走までして我々を喜ばせる。放牧のヤク、羊の群れも起伏の緩い草原に、蟻の群れのように展開している。陽光は暑さより「刺す」を覚える。新・新蔵公路は高低が少なく、草原と草原を区切る峠も低い。大の湖沼を区切るように六〇キロ平均で走る。吉瓦多にてキャンプ。「二六一キロ」

■九月十日、達則錯湖の半ばから湖畔の道は粘土質となり、水蝕溝や降雨地の轍が乾燥して深く水が溜まり右往左往、ヤルツァンポ河のゴーロのほうがありました。草原に混在して尼瑪辺りまで続いた。色林錯湖は豊かな草原となり、野生動物の群がりを見る。途中の峠茶屋(青海の回族)で、シシカバブを味わう。ポラロイド写真を提供して交

歓サービスとなる。峠を下って唐古拉山を源とする札加蔵布を渡ると、月珠(那曲への分岐点)に二十時着。さすが月は上り陽は落ちんとする。この直前にキャンプ地の選択で、トラック運転手(彼のみ漢族)が、不調の車のストレスからか、西蔵人や我々までに反発するが、同情するも無視。下弦の月は中天に上る。「三〇八キロ」

■九月十一日、安多に向かう。前日同様悪路多く、降雨後は不通となること多い由。付近の金鉱開発のための基地を建設中で、大型機械が並んでいる。道路改修も同時に行うことだろう。

左に唐古拉山が近付き高度が上がる。錯那湖を左に見るとやがて山間に入り、青蔵公路上の安多に着く。山腹に兵站とガソリンスタンドが並び、キャンプの環境ではない。招待所の堅いベッドで久しぶりに安眠する。「二二二キロ」

■九月十二日、青蔵公路を北へ唐古拉山を越える。ここで西蔵高原と別れて、青海省の長江源流域に下る。公路は昨日までに比べて高速道。メーターは九〇キロを指し、早々に沱沱河に着く。「二八〇キロ」

■九月十三日、長江源流の橋を渡る。長江源流は唐古拉山と崑崙山脈との南北の間に、我々の走った青蔵高原を源とする広大な湿潤地帯である。公路は道路改修と重なり一部悪路に

なる。また青海―西蔵を結ぶ物流の大動脈でもある。大型トラックが間断なく行き交う。その中には、内蒙古・青海省のラマ教徒のカイラス巡礼者で満員のトラックが騒々しくカイラスに向かって行く。

崑崙山の登りでやっとスピードが上がる。氷河の見おきめで、三千メートルの世界に徐々に下る。暑さを覚え、砂漠の広がりにラクダの姿が見え出すと、すぐ格爾木賓館に着いた。十二日ぶりのシャワーで一息。ここで西蔵から青海クルーに交替する。交歓のビールを痛飲する。「四二〇キロ」

■九月十四日、茶卡招待所へ。「三五四キロ」

■九月十五日、鳥島を見て、青海湖賓館へ。「一八五キロ」

■九月十六日、日月山を越え西寧へ、タール寺を見て賓館に。「三五四キロ」ここで車による走破は終わった。

*

九月十七日以降は、蘭州―西安―上海を経て、十九日夜、全員無事に帰国した。

行程中について、拉薩周辺は、夕方に、モンスーン終末を告げる雷鳴を聞く。雲量は多く、西に向かうほど晴れる。宇宙との調和を歌うコスモスが咲き、輪廻転生を論ずラマ寺の金堂の輝き。西蔵の空は何日も青く高かった。

道路は公路とされるものは、解放後軍用道路として常に整備されているが、枝道と、薩嘎兵站以西カイラスへのヤルツァンポ河の旧ルートは荒廃に向かっている。また注意すべきは、古今の資料と現西蔵人達の通称の地名・湖名(錯湖)に混同があるようだ。

各走行キロ数は立ち寄りを含む。また措動洞錯を結ぶ線上、ヘディンのシャ・カンシャム(七六六〇メートル)は七千メートル前後とみられ、落胆する。

同行した西蔵クルーとコックは、各遠征隊の支援による経験を積んで、今や心・技ともよくなり、ネパールの水準に並ぶものであった。

四度の入蔵で、西蔵の東西と青蔵高原・アクサイチン高原を巡ってきたが、ヘディン永年の足跡の一端に触れたにすぎない。またこのヘディンの偉業を知ると同時に、わが河口慧海の仏法求法の孤独な旅の純粹な信念は、まさるとも劣らぬ輝きを感じた次第である。

次はサトレジ河源流域の仏教遺跡を訪ねたい。そして冷戦も終わり、中・印関係の動きをみて、最後にラダックよりすでに消えているイスラム隊商ルートを訪ね、カラコルム峠を越えることができるれば、スウェン・ヘディンやスタインを偲ぶ道なき道を知ることができる。我が終生の夢である。

書籍受入報告 (1994年9月)

著 者	書 名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
根深誠	遙かなるチベット：河口慧海の足跡を追って	315pp/22cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
ロバート・スワン	北極を歩く (海外旅行選書)	294pp/20cm	図書出版社	1993	出版社寄贈
K・アンドリュース	イカロスの飛行 (海外旅行選書)：わが心の祖国ギリシア	346pp/20cm	図書出版社	1994	出版社寄贈
七時雨の自然と語らう会	七時雨の風	158pp/22cm	白山書房	1994	発行者寄贈
橋本廣	山景画集：立山・銀岳・ヒマラヤ・アルプス	109pp/21cm	桂書房	1994	著者寄贈
九里徳泰	人力地球横断：MTBとカヌーと徒歩で北極圏から南極へ	301pp/22cm	山と溪谷社	1994	出版社寄贈
森澤堅次	山を訪ねて：会津の日向山・日鷲山	278pp/19cm	歴史春秋出版	1994	著者寄贈
奥野幸道	丹沢山塊：大登山地図付 (地球の風 No. 2)	128pp/19cm	日地出版	1994	著者寄贈
芦安村・編	芦安村誌	1226pp/27cm	芦安村	1994	発行者寄贈
Audrey Salkeld・編	Climbing Mount Everest : The Bibliography	120pp/21cm	Sixways Pub.	1993	購入
Todd Skinner 他	Modern Rock Climbing				
	: Free Climbing and Training	161pp/23cm	ICS Books	1993	購入
Skip Harper 他	Heel and Toe : The Climbs of Greater Vedauwoo	226pp/23cm	Heel & Toe Pub.	1994	購入
Pete Sinclair	We Aspired : The Last Innocent Americans	232pp/24cm	Utah State Univ.	1993	購入
Frith Maier	Trekking in Russia & Central Asia				
	: Traveler's Guide	370pp/22cm	The Mountaineers	1994	購入
Don Reid	Yosemite Climbs : Big Walls	211pp/23cm	Chockstone Press	1993	購入
Mike Stroud	Shadows on the Wasteland				
	: Crossing Antarctica with Ranulph Fiennes	182pp/24cm	The Overlook Press	1993	購入

図書紹介



カット 中村あや

大森弘一郎・写真集
『空撮ヒマラヤ』

空撮「北アルプス」、空撮「日本の名峰」等、航空山岳写真の作品を数多く発表されている大森弘一郎氏。東のカンチェンジュンガから西のダウラギリまでネパール・ヒマラヤの著名峰をほぼ含んだ作品集である。自ら操縦桿を握っての撮影は、迫力いっぱい、素晴らしい一枚一枚だ。

英国の著名登山家クリス・ボニントンが本書の前書きを書かれているが、その中で「私もヒマラヤの巨峰群の上を何度も飛んだことがあります。その聳え立つ岩壁は雲の中に隠れてしまうこともあります。よく晴れた日は、どんな細部までもよく見えます。けれども、そんなときでさえ、ながめは一瞬のうちにすぎてしまい、それをフィルムに収めることは至難の

技なので、あとにはただつかのまのイメージしか残りません。

この本はそうしたながめを、くり返し好きなだけ味わわせてくれます。それだけではありません。この本は巨峰群を遠くから調べる機会を与えてくれます」とある。まさしくそのとおり写真集である。また、巻末に詳しい写真解説があるのも嬉しいサービスだ。

一九九四年九月 山と溪谷社刊 一〇八ページ 四千二百円(茂見 猛)

東北大学山の会・編

『チベット高原の盟主
ニエンチエンタンラ』

一九八六年に東北大学山の会がニエンチエンタンラ峰(七二六二メートル)に初登頂した報告書である。

内容は登山編と学術編に分けられ、登山編は出発に至るまでの経緯、登頂記録、隊員点描などがあり、ルート工の苦闘の末、BC設営から四十四日の五月八日、暗闇の中の二十一時十分三分三名が登頂に成功、五〇メートル直下にビバーク、翌日再登頂している。学術編は、植物班の成都からラサまでの川蔵公路沿いの調査記録と高所医学(生理)に関する調査報告である。(人文班による人文編は「チベット・曼陀羅の世界」その芸術・宗教・生活)

を一九八九年に刊行

一九九四年六月 東北大学山の会刊

二八一ページ (大橋 晋)

Jack Ede・著

『Mountain Men of Milford』

これは、ニュージーランドの登山家でもある著者が紹介する、ミルフォードの歴史を作った山男たちの物語であり、フィヨルドの入り江から切り立つ崖のような山との闘いの、著者自身による登山記録でもある。

日本の旅行者にも人気の高いミルフォード・サウンドは、この地に最初に足を踏み入れたイギリスのウエルズ地方出身のJohn Goochによって命名された。それは彼の生地ミルフォード・ヘブンによく似た地形だったからだろう。船員であった彼をはじめ、アザラシ・ハンター、測量技師、探検家、道路建設者、登山家など、ミルフォードの歴史を作った人々を紹介しているのが第一部で、第二部が著者自身の体験による、この一帯の登山記録である。簡素なつくりながらも、日本山岳会への著者自身のサインも入った、ガイドブックでは味わえない奥行きをもった著書といえる。

一九八八年のコピーライトのある自費出版 (山口裕一)

根深 誠・著

『遙かなるチベット
―河口慧海のたどった足跡を追って』

本書は副題にあるとおり、河口慧海のたどった足跡、その謎とされているチベットへの侵入経路を解明するべく出かけた、検証の旅を綴ったものである。

著者がシェーコンバからツアルカに戻るとき出会った、チベットからの亡命僧たちに見る、中国のチベット政策による周辺の村への影響。またラサヤカンリンポチェの興廃など、旅の途中に訪れた、ヒマラヤ奥地の村々の生活習慣、その移り変わりを、豊富な経験のもとに記した風土記でもある。

ただ一読される前に、カリガンダキの奥、とくにトルボ周辺の詳細図を用意しておかれると、より興味は増すであります。

一九九四年十月 山と溪谷社刊 三一五ページ 二千六百元 (飯田進)

泉 康子・著

『いまだ下山せず
―ドキュメント 山岳遭難搜索』

一九八六年暮から正月の日程で、ある町の山岳会の三人パーティーが、北アルプスに入山した。予定のコースは

合戦尾根から大天井、東鎌尾根を経て上高地に下山。予定期日を過ぎても帰ってこなかった。地を這うような搜索と調査によって、遭難地点を逃げ道の常念岳方面に推定し、翌年の初夏、ついに常念一の沢の雪渓中に三人の遺体を発見した。

その経過を当事者の一人が綴った本書は、通常の遭難搜索報告や追悼文集などと異なり、遭難者と搜索者一人ひとりの息づかいが聞こえるような、卓越した記録文学に昇華しており、それが登山に興味のない人々にも広く読者を見出した所以であろう。

一方これは、平均的な町の山岳会の生態的観察ともいえる記録であり、登山者にとっても極めて興味深い読みものである。また遭難地点推定のための情報収集と分析に関する記述は、試行錯誤する経過も含めて、多くの登山団体に貴重なノウハウを提供するにちがいない。

なお、雪崩の巣となる冬の一の沢が下山コースとして山岳雑誌に紹介されたことの正否を、著者は鋭く問うているが、古い登山者は今昔の感を覚えることだろう。

探検を起源とする登山は本来、自己責任行為なのだから。

一九九四年五月 宝島社刊 二六二
ページ 千七百円 (平井吉夫)

会務報告

九月定例理事会

日時 九月八日 十八時四十分～二十時二十分

場所 日本山岳会会議室

【出席者】藤平会長、中村副会長、小倉、大森、村井、山口、片岡、南川、松浦、伊藤、南井、渡邊、溝口、中川、山本、大谷各理事、中島、川崎各監事、西村、宮下、神崎、重廣各常任評議員

【委任】嶋原副会長、大倉、水野、堀井各理事、齊藤、湯浅各常任評議員

議事に先立ち、中村進会員から、ヤルツァンポ川カヌー探検隊合同捜索隊の終結に当たっての経過報告があり、武井家からの挨拶が伝えられた。

◆議事

【審議事項】

一、プラスチック・ブーツに関する広報ポスターの作成について 小倉

日本勤労者山岳連盟・日本山岳協会・日本山岳会・ヒマラヤ協会の連名で、使用メンテナンズについてのポスターを作成、配布する。 承認

二、「岩崎崇至写真展」後援依頼について 小倉

「ロッキーと日本の山々」と題して

九月二十七日十月二日、新宿三越で開催。 承認

三、「北安曇野」ビデオ制作に写真使用許可依頼について 小倉

日本コロンビアから榎元会長の写真使用の依頼があった。 承認

四、青年部委員の追加について 村井

沢田喜生、高野正道、岡本憲、谷川太郎、荒井俊彦、野口健の六名の追加承認を要請する。 承認

五、マカルー峰登山隊第二次隊員選考について 重廣

①選考委員会の構成 実行委員会委員長・藤平正夫、副委員長・嶋原啓祐、同・中村純二、登山隊長・重廣恒夫、登攀隊長・山本宗彦、事務局長・大倉昌身、事務局員・村井龍一、同・渡辺雄二

②六月五日十三時から本会会議室及び図書室で面接し、八月十二～十六日の艱岳訓練合宿に四名に参加していただき、選考資料とした。

③この結果、松原尚之(24・法政大学山岳部)、竹内洋岳(23・立正大学山岳部)を追加隊員として内定した。残り二名の隊員については、今後適宜決定したい。

④その他として、日通の倉庫を借り入れ、梱包にかかるので、物資の応援をよろしく(村井)。チベットに對する登山料の詳細については次回

次代に残そう美しい山と溪

に報告する(重廣)。

承認

【報告事項】

一、マカルー峰・九十周年合同募金委員会について 小倉

第一回を九月十二日に開催。

二、山研について 溝口

八月二十六日、自転車振興会から補助金確定通知が到着し、平成十一年三月末日までの報告義務を有することと全額給付が確定した。

三、ルーム・リフォーム 中川

集会室・事務室の改善、収納・エアコン・水回り・トイレの改善を柱として着工し、八月二十七日に引越して完成した。マンション管理組合からの要望もあり、節度をもって使用したい。

四、スケジュール表について 中川

九十周年行事などの日程重複を防ぐために一九九五年分を作ったので、利用していただきたい。

五、自然保護専門委員会の山研ガイドについて 大森

八月一日～三十一日に六名のインタ―プリターが交替で行い、一六一名の案内と四十枚のアンケート回答があり、一つの指標・目標になったと考えている。まとめて会報「山」で報告する。

六、ビールパーティーについて 中川

九月三日、新ルームの披露をかねて行い、九十五名が出席、盛会であった。

七、その他

①海外登山基金の交付を受けた富山岳連・JAC富山支部合同ガッシュブルム登山隊の三名が八月十二日、登頂に成功した。

②「山」九月号で来年度の海外登山基金の募集要項を発表する。 村井

③西堀探検館の完成について 小倉

④今西錦司元会長の記念碑完成披露パーティーについて 小倉

⑤「組織見直し」の中間報告。中島

⑥全国支部懇談会(主管関西支部)十月十五～十六日に、多数の参加を望む。

【新入会員承認】

神戸信和他二十五名

■会員異動

▼物故 笹川慶子(八八一) 6・8

・3 土肥正毅(五五五五) 6・8・10 柿花道子(八九四三) 6・8・19 福永次男(八三五五) 6・9・8

▼退会 大神田伊曾美(一〇九七四) 6・9・12

「山」の広告募集

会報編集委員会

このたび会報「山」の広告について、理事会の議を経て、次のように取り計らうことといたしましたので、お知らせします。

なお、新広告主に対する広報については、会員の口コミなどによりよろしく願ひ申し上げます。

【取扱要領】

1) 広告料

①裏表紙 1/8ページ (縦56mm×横77mm)

年間契約 100,000円

(現行: 1/8ページ 1回/5,000円 年間/60,000円)

②記事 1/8ページ 1回契約 10,000円

年間契約 80,000円

2) すすめ方

①会員の口コミなどにより広告主を募集する。

②申込は平成7年1月末日とする。

③新料金による掲載は平成7年4月号(4月20日発行)からとする。

④広告主は、山岳関係の出版社、旅館、山小屋、スポーツ用品メーカー・店、旅行代理店、薬品・食品メーカー等。

3) 問い合わせ・連絡先

〒277 柏市豊四季646-157 伊藤 敏

TEL/FAX 0471-74-1103

INFORMATION



◆八方尾根懇親スキー山行

集委員会

恒例の八方尾根にて今回も行います。ふるってご参加ください。

日時 平成七年一月十四日(土)～十六日(月)祝振(二泊三日)

◆第八回 後藤三男油絵展

信州の山と安曇野、ヨーロッパアルプス、ネパールヒマラヤ、スペイン風景を描いています。

日時 平成七年一月十二日(木)～十八日

場所 八方尾根第一ケルン「八方池山荘」に宿泊

費用 二万円(交通費、昼食費別。懇親会費、保険料を含む)

申込 はがきに氏名、会員番号、年齢(保険申込に必要なため)、住所、電話番号を明記の上、日本山岳会集委員会まで。折り返し詳細案内書を送ります。

(五十名まで)(担当・柳下棟生)

場所 東急日本橋店六階 美術画廊

◆ルームに情報コーナーを設置

総務委員会

集会室改装にともない、ルームの入り口にインフォメーションのコーナーを設けました。

従来の公式通知板とは別に会員個人個人が自由にご使用になれます。山の情報収集、山道具や書籍の交換、ルーム待ち合わせの伝言板などにご利用ください。

(担当・藤田礼子)

◆ワシタカの渡り情報提供のお願い

「信州ワシタカ類渡り調査研究グループ」では北アルプスでの渡りの調査をしています。もし北アルプスでの渡りを見た方がいましたら、場所、日時、種類、方向などわかる範囲でその様子を連絡していただけたら幸いです。また昨年度(一九九三年)の調査報告書を頒布しています。B5判、六〇ページ、千円、送料二七〇円(残部僅少)

●連絡先 〒三九九一八三 長野県南安曇郡穂高町六〇一―一 植松晃岳

ルーム日誌

1日 遭難対策委員会

5日 連絡委員会

6日 自然保護委員会 山研委員会

図書委員会 スケッチクラブ

7日 青年部 ジャック93

8日 常務理事会 理事会

9日 財務委員会 百年史委員会 フ

12日 オトビデオクラブ

12日 自然保護専門委員会 募金委員

13日 会 アルパインスキークラブ

14日 二火会

19日 ジャック93

20日 総務委員会 資料委員会 自然

21日 保護委員会

22日 フィルムビデオ委員会

26日 三水会 ジャック93

28日 集委員会

29日 ジャック93

科学委員会 学生部

訂正 九月号一〇ページ図書紹介の

『芦安村史』は『村誌』一二二六ページに、『西藏漂白』は『漂泊』に。

日本山岳会報 山 594 号

1994年(平成6年)11月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102 東京都千代田区四番町

5-4 サンビュウハイツ

四番町

TEL 東京(03)3261-4433

振替口座 東京3-4829

発行者 藤平正夫

編集人 伊藤 敏

印刷 株式会社 双陽社